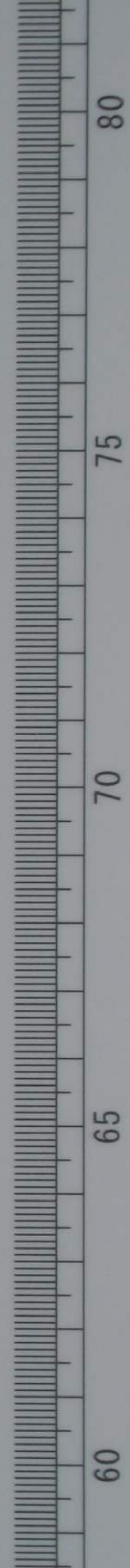


著子品評謝

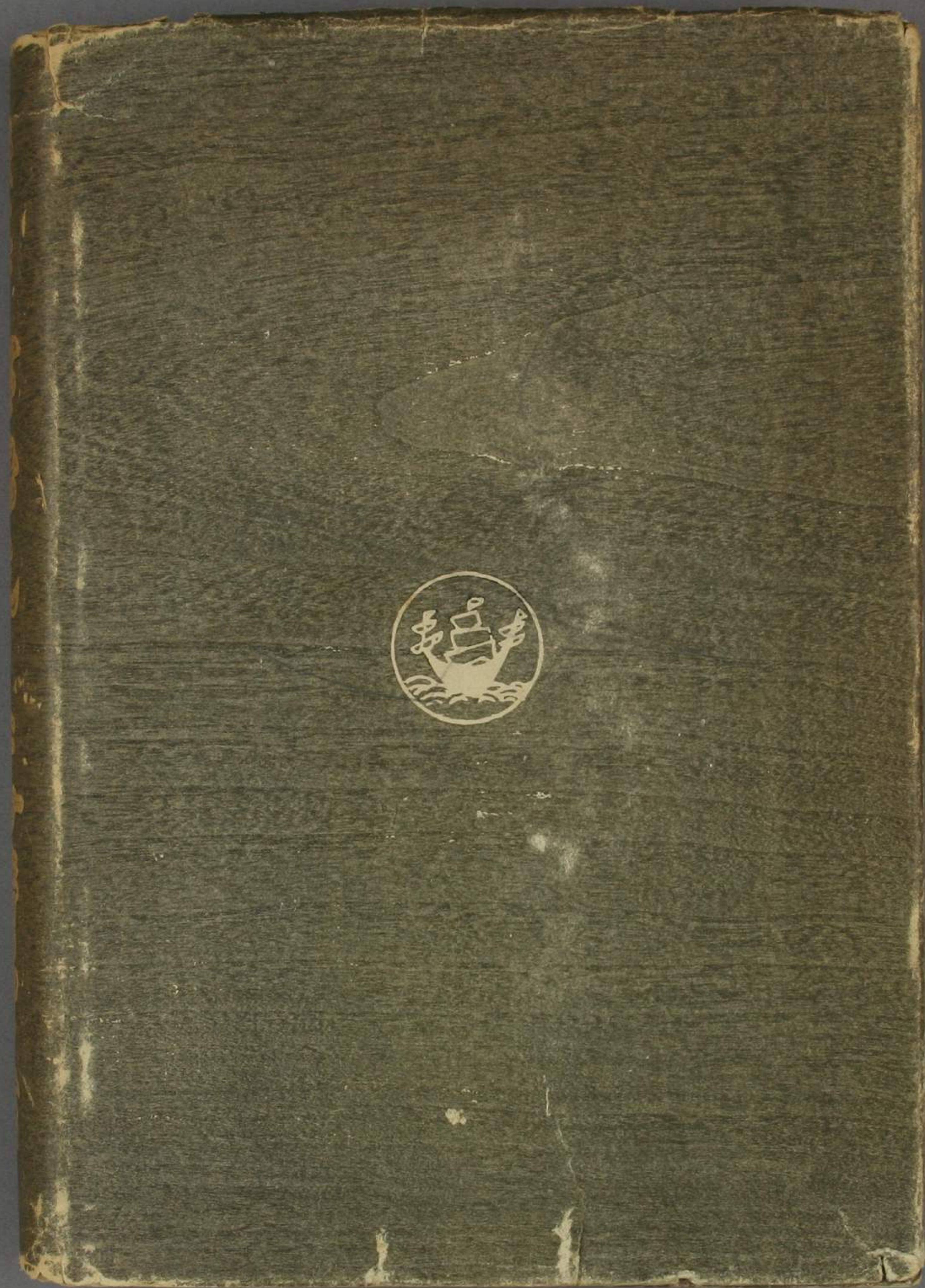
集歌
瑠璃光

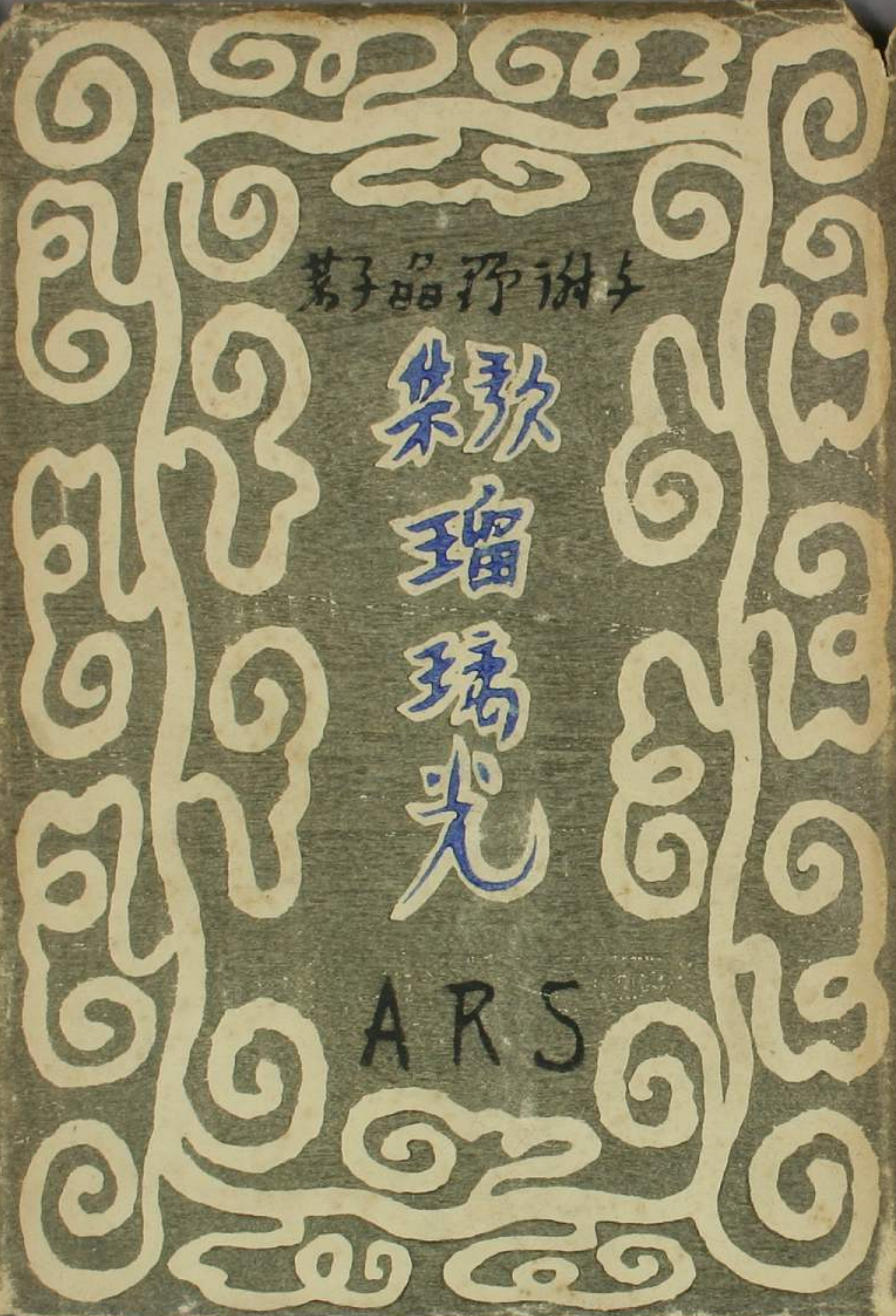
ARS



歌集 踏踏光

正徳御記



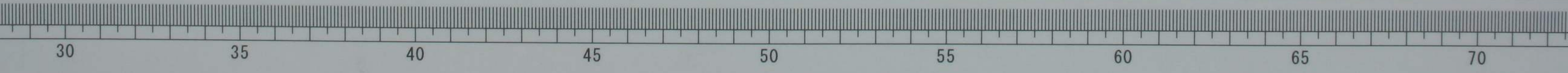


著子品評謝子

集歌
瑠璃光

AR5

翠泉
瑠璃光
上海圖書館藏



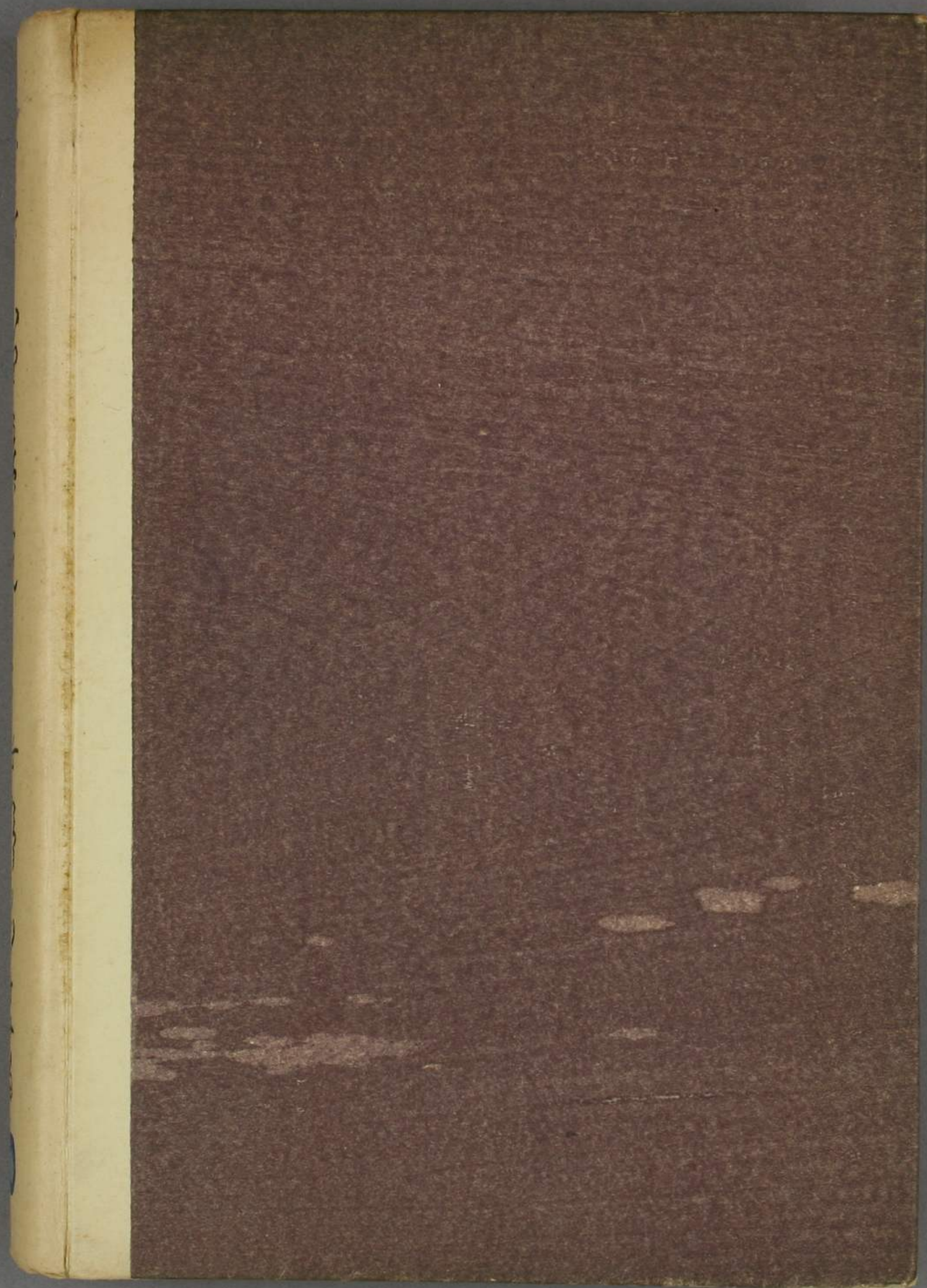


歌集

增編

上
下
附
前
子
著

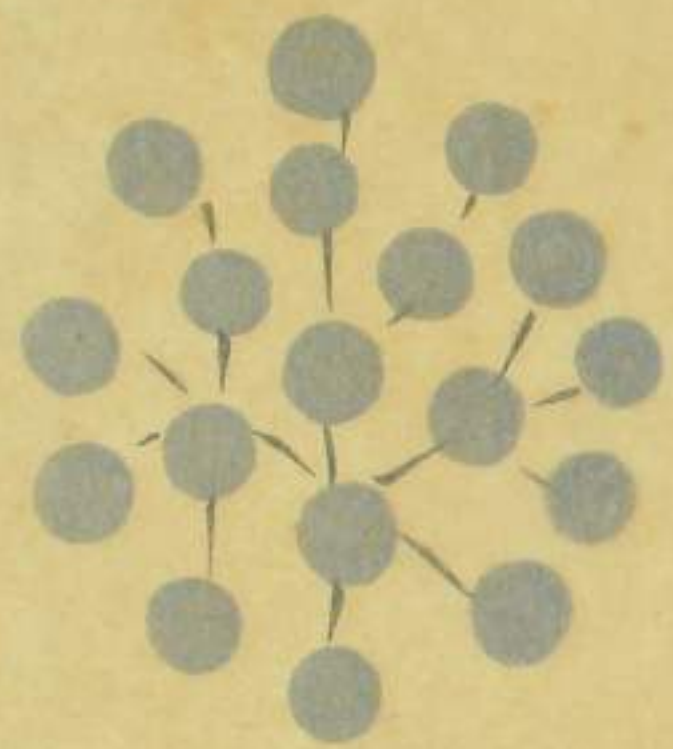






光 璃 瑠

著子晶野謝與

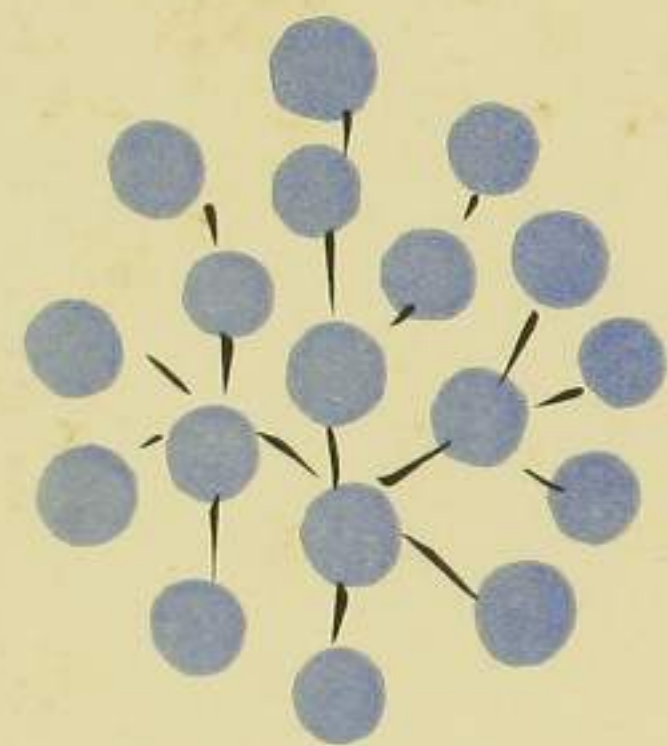


1925

A R S

光 璃 瑠

著子晶野謝與



1925

A R S



鏡中小景

(詩十章、自序に代へて)

與謝野晶子

x

夏、眞赤な裸をした夏、
おまへは何と云ふ強い力で
わたしを壓へつけるのか。
おまへに抵抗するため、

わたしは今、
冬から春の間に貯めた
命の力を強く強く使はされる。

夏、おまへは現実の中の
熱し切つた意志だ。
わたしはおまへに負けない、
わたしはおまへを取入れよう、
おまへに騎^のつて行かう、
太陽の使、眞晝の靈、
涙と影を踏みにじる力者。

夏、おまへに由つてわたしは今、
特別な昂奮が
偉大な情熱と怖しい直覺とを以て
わたしの脈管に流れるのを感じる、
なんと云ふ神神しい感興、
おお、詩が出来相になつて来た。

x

わたしは生きる、力一ばい、

汗を拭き、ヘンを手にして。
今宇宙の生命の気が
わたしに十分感電してゐる。
わたしは法悦に有頂天です。
雲が一片あの空から覗いてゐる。
雲よ、おまへも放たれてゐる仲間か、
よい夏だ、
夏がわたしと一所に燃え上る。

×

磯で見てゐると、
海が急に膨れ上り、
前脚を上げた
千匹の大馬になつて
ましぐらに押寄せる。

一刹那、背を乾してゐた
岩と云ふ岩が
身構へをする隙も無く、
だ、だ、だ、ど、どおん、
海は岩の上に倒れかかる。

磯は忽ち一面、
銀の溶液で掩はれる。
やがて其れが滑り落ちる時、
眞珠を飾つた雪白の絹で
撫でられぬ岩も無い。

一つの紫色をした岩の上には、
波の中の月桂樹――
緑の昆布が一つ捧げられる。
飛沫と爆音との彼方に、
海はまた遠退いて行く。

x

手紙が山田温泉から着いた。
どんなに涼しい朝、
山風に吹かれながら、
紙の端を左の手で
抑へ抑へして書かれたか。
この快潤な手紙、
涙には濡れて来ずとも、
信濃の山の雲のしづくが

そつと落ち掛つたことであらう。

x

涼しい風、そよ風、
折折あまへるやうに
窓からはひる風。
風の中の美しい女シエネ怪、
わたしの髪にじやれ、
わたしの机の紙を翻へし、
わたしの汗を乾かし、

わたしの氣分を
淺瀬の若鮎のやうに、
潑刺と跳ね返らせる風。

x

宇宙から生れて
宇宙のなかにゐる私が、
どうしてか、
その宇宙から離れてゐる。
だから、私は寂しい、

あなたと居ても寂しい。
けれど又、折折、
私は宇宙に還つて、
私が宇宙か、
宇宙が私か解らなくなる。
その時、私の心臓が宇宙の心臓、
その時、私の目が宇宙の目、
その時、私が泣くと、
有頂天になつて泣くと、
屹度、雨が降る。
でも、今日の私は寂しい、

その宇宙から離れてゐる。
あなたと居ても寂しい。

x

空には七月の太陽、
白い壁と白い河岸通りには
海から上る帆柱の影。
どこかで鋼鐵の板を叩く
船大工の槌が響く。
私の肱をつく窓には軟風。

窓の直ぐ下の潮は
ペパミントの酒になる。

x

まあ、華やかな、
けだかい、燃え輝いた、
咲きの盛りの五月の薔薇。
どうして来てくれたの、
このみすぼらしい部屋へ、
この疵だらけの卓テーブルの上へ。

薔薇よ、そなたは
どんな貴女の飾りにも、
どんな若い戀人の贈物にも、
ふさはしい最上の花である。
もう若さの去つた、
そして平凡な月並の苦勞をしてゐる
哀れな忙しい私が
どうして、そなたの友であらう。
人間の花季はなきは短い、
そなたを見て、私は、
今ひしひしと之を感じる。

でも、薔薇よ、
私は窓掛を引いて、
そなたを陰影の中に置く。
それは、あの太陽に
そなたを奪はせない爲めだ、
猶、自分を守るやうに、
そなたを守りたい爲めだ。

x

星が四方の棧敷に

きらきらする。
今夜の月は支那の役者、
やさしい西施さいしに扮して、
白い絹團扇で顔を隠し、
ほがらかに私を歌ふ。

x

その路をすつと行くと
死の海に落ち込むと教へられ、
途中で引返した私、

卑怯な利口者であつた私。
それ以來、私の前には
岐路と
迂路とばかりが続いてゐる。

木下杢太郎様に捧ぐ

瑠
璃
光

與謝野晶子

裝幀圖案

山本
鼎

榮華など見も知らざるにおぼつかな捨てんと神に
子の誓ふかな

堂の奥天主の前に進むなり代母だいぼの被衣かきぎわが子の被
衣

或時はわれよりよきを知らねども今日子に引かれ
マリヤを拜す

われもまた天主に子をば奉るもの思ひする人に似
るなど

母に似ず地獄と云へるところをば幻にだに見も知
らぬ人

わりなくも尼君達の歌聲に涙流しぬ子の死ねること

御堂なるもの皆いみじふらんすのわが長老のやま
と言葉も

少女子の祈りの心集まればましてマリヤの御像光
る

尼君の黒き衣は身じろぎにそよとも鳴らずいみじ
かりけれ

尼君の握手を賜ふ廣間より涼しき國はあらじとぞ
思ふ

あぢきなき砂子すなごの花と思ひつつ哀れになりぬ山女
郎花

鈴蟲を飼ふにふさへる美しくしき子の少年のむらさ
きの帯

めでたかる今日の女王にあらぬごと人に語らんこ
し方も無し

年月を數へ給へと云ふ人に逢へることのみ昔に變
る

心のみ思ひ上りてありしなど昔を云ふはあはれな
るかな

こし方の華やかならばかへり見て嬉しからまし悲
しからまし

一隅の心と云へる暗室が總てとなればあぢきなき
かな

水色に灰色の層かさなりしそれも昨日の明るさに
して

初めより死ぬ命などもたざりし石のたぐひに變る
ばかりぞ

一生の大道だいどうと云ふところにはあらぬ小徑せうけいのなつか
しきかな

はかなさの慰むばかりめでたかる友染どもをもて
もこよかし

今日著れば夏より馴れし麻なれど秋の大氣に觸る
るこちす

朝ゆふべ言はん言葉に代へて著る女の衣の美しくし
きかな

二三人しろき浴衣ゆふたの人ありて月明のごとすずし山
莊

八月の富士の雪解の水湛へ甲斐の谷村やむらを走る川か
な
(以下甲斐國にて)

末遠き桂の川も富士の嶺の雪解の水の行く道にし
て

をかしけれ淨衣じやういのむれのあと踏みて下の吉田を歩
めることも

草高き原のおもてを風吹けばまぼろしの如馬車の
現る

いみじかる雲に向ひて船出する船津と覺ゆ川口の
湖

石門せきもんに第一境と書きし人入りつる道をわれも求め
ん

人間を心におかず山風の騒ぐところに入りぞはて
ぬる

ラバ黒しこれをば山の涙ぞと昔は見けん火なりし
なれば

燒石きせきの西湖せいこの根場ねばに船寄りてあはれあはれと身の
思はれぬ

見かへれば西湖の磯に寄る泡のほのかに白く續き
たるかな

つぎつぎに湖水を越えてゆく道のさびしくなりぬ
八代の郡

ラバ落ちて缺けたる湖水全きに變ることなく哀れ
なりけれ

燒石もびさしき時のあるならん同じところに寄り
もつどへる

片側に烏黒の泡のたまるなりラバと知れども悲し
き湖水

低き木の柵めく門の内側の精進ホテルの山百合の
花

輿にして烏帽子が岳を逍遙す身につもりたる憂愁
のはて

もろしてふ沙羅の花をば手にとればことわりのま
まくづれけるかな

散るをのみ見て沙羅の木の榮華をば眺めぬことも
寂しかりけれ

その木とも見ん梢無し雲間より落ちしと云ふにふ
さはしき沙羅

朝山の清き雫のこちする擬寶珠の花のつづくき
りぎし

路やがて遠き信濃の國見ゆる山の背後に移りたる
かな

奥山の毒うつぎとて女郎花萩枯梗よりあてなるが
立つ

美しくしき指紋の如く雪残る信濃の山の見ゆる路か
な

まだ知らぬ冷たき風の登りくる溪を覗けば見ゆる
湖

本栖湖をかこめる山は静かにて烏帽子が岳に富士
おろし吹く

いと深き水がとどむる影のごと静かなるかな本栖
の山は

本栖の湖地にしたたりし大空の藍の匂ひのかんば
しきかな

本栖村清水に代へて湖を汲むと云ふなり三十戸ほど

空破れ富士燃ゆるとも本栖湖の青犯されず静かな
らまし

青木原あまねく陰の色となり信濃の山に雪ぞきら
めく

わが思ひ及ばぬ山の起き伏しを甲斐と信濃の中に
眺むる

甲斐の國霧の中なるむら山の青鈍色のなつかしき
かな

上なるは明るく山の底なるは青縞子色の四つのみ
づうみ

そことなく筆觸りほどもり上りかつ動かさる青き
湖

明眸に勝る色をば作らんと塗りたる山の底のみづ
りみ

末とげぬはかなごとには似るも無し山の風物重り
かにして

湖の烏帽子が岳の背にあるを青雲としてめでぬべ
きかな

富士川の白き腕は舞ふ雲と千草の底におぼれはて
てき

なつかしき烏帽子が岳の草の肩うつるところに船
夫われを待つ

本栖湖は山のあなたとなり
にけり青春のまた見が
たきがごと

くれなるの毒うつぎをば湖の
小舟に置けば美しく
きかな

山山を船夫指させど身に
急むは精進の濱のくらし
焼石

ほととぎす樹海の波につつま
れてうらやはらかに
鳴ける黄昏

湖の一ところをば赤くして
精進の村に灯のつきに
けり

精進村ともし灯つきぬ鶯に
うみて夜に入ること
急ぐや

日落つるとともに不思議はかき消えて富士むら山の
一つとなりぬ

雲うごく富士ゆる心おちるねば松籟山をいでて眺
むる

山を見て愁ふる時に少女来て白き扇をとらせたる
かな

大佐より樹海のラバを巧妙に踏みつる馬の話など
聞く

ほの白き天の川をば見に出でて夜鳥の啼くに逢へ
る寂しさ

いつしかとわが花ごころ根も枯れて旅にこしやと
夜の哀れなり

枕上窓のよろひ戸あかつきの樹海の風の末端に鳴る

曉は雲はた水も動かずて死の莊嚴のここちこそすれ

白雲のうつるところに小波の動き初めたる朝のみづらみ

湖は杉をうつしてきはやかに孔雀の紋の作らるるかな

潮鳴る音にくらべて寂しけれ樹海の風は一しきりにて

世に知らぬ寂しき風の音立つる樹海を半雲おほひけり

湖をすべてななめに覗きたる撫なの林のながき路かな

山高きところなれども地の底に湖畔は似たり精進しやうじんの夕

白雲は富士の珊瑚の頂を少しくだれるきはに臥床ふしどす

ほの赤き小舟ばかりの影となり富士のうつれる暮方の水

去る雲も枕さだめて寝る雲もあてに振舞ふ富士の夕ぐれ

富士の嶺の裾野の雲に北海の臘虎の群もまじりてぞ行く

たそがれの風に靡くは岩山の蠟石色のつめたき玉
簪花

湖の冴えたる上にうち曇る樹海の波をおける寂し
さ

ほととぎすホテルの裏の花畑に臨める富士は紫に
して

その昔ラバの流れし日の熱を水は思はずあまりに
冷えて

こざかしく死をかたどりて焼石のありかくばかり
醜くからんや

それぞれの中に入日を負ひて立つ松籟山の深き暗
色

動かざる愁ひとなりぬ寂しなど思ひし頃に似ざる
旅かな

山めづる心の外のころより朝暮の霧の身にも沁
むかな

旅の日の朗らかにして寂しけれ苦しかりしもなつ
かしきかな

われいたく異ることを思はずて富士の麓の湖畔に
いねん

朝山の霧のしづくの松が枝にかかるを見れど湖の
無し

御空をば引くや大地の引かるるや霧の中なる赤松
の網

藍色の濃霧の中に返の枝はつはつ見えてうぐひす
ぞ鳴く

包みつる霧よりいのち返されて走りいでくる湖の

限りなく富士より雲のひろごりて人ははかなき物
思ひする

二三人うすごろも著て遊ぶなり富士に對する赤松
の臺

疊れどもなほ眞近きは玻璃の質失はぬなり朝山の
雲

赤松が七つの條を引きたれば七間ほどの富士と云
はまし

富士にある雲のひかりと赤松の精進しやうじの山の相てらす晝

日昇りて白き光にしびれ行く湖上の波の見えわたるかな

自らの若さに飽くを知らねども山の青きに飽く日もあらん

さながらの形に富士をつつみたる眞白き雲のをかしき夕

うぐひすや富士の西湖さいこの青くして百歳の人わが船を漕ぐ

船にさすからかさ重し湖へ富士の雲皆おちんとすらん

川口の湖上こじやうの雨に傘させば息づまりきぬ戀のごと
くに

雲さわぐ裾野が原に萩の花唐紙たがしの紅べにの色したる立
つ

わが目には暗きところの見えずして白くさびしき
山中やまなかの湖うみ

そこばくの隔りをおき見る水の色は雲より寂しか
りけれ

行くところ見がたく霧の迫りきて草の匂ひの立ち
迷ふかな

富士の雲つねに流れて東の間も心おちぬ山中の
湖

から松のところどころに屯つとむする裾野が原に霧くだ
りきぬ

籠坂の峠に及び見かへれば雲に引かれてなびくみ
づらみ

雨こぼれ葡萄の色の山の霧うづまくもとの籠坂の
路 (以上)

ひと本に思ひあまれる紅き花あまたつけたるアマ
リリスかな

刺しつれば禍わざの矢と思ひつれ傷の口より薔薇流れ
出づ

心をも綾の衣がやはらかにつつむと知りぬ女人と
生れ

西方に淨土をもたずいつとなく男の胸に天堂を置
く

人の世を浮べる雲といひなすはなまめかしかる教
へなるかな

戀しきは近きいにしへ忘れんと涙流すもそのほど
のこと

消息に墨のしづくの散るものかささやかなれど魔
の形して

愁ひつつめでたきことを思ひつれその世を今にな
すよしもがな

燃え立つも消え行くことも目に見えぬあてなる戀
の焔なるかな

戀すればわれも五彩の圓光を負へる佛のここちこそすれ

第一の獅子に乗りたる魔王をば捕虜としたるそのちのこと

黄金の戀のところが流すなる紅き涙よつきずあれかし

金閣寺北山殿の林泉にいつ忍び入り咲ける野薔薇ぞ

大徳寺唐の格子のあひだより皐月の光させばめでたし

ほととぎす踏むにならはぬ白けたる京の御寺の簀子にて聞く

加茂川の夜の灯などは數ならず大極殿の柱めで
たし

山よりも御所の木立の黒めるがなまめかしけれ西
京の夏

故郷を雪ぐもりする一月の末に見捨てて海行かん
君 (以下茅野蕭々子との別れに)

やるは憂しうまごの世まで歸りこぬ浦島と云ふ人
ならねども

身の弱く二とせほどの別れにも怪しきことを歎き
とぞする

君見よと烽火ひしを揚げんさかひにもあらず心のうち
に忍ばん

かへり見をしつつ行けかし此方へは海賊船のごと
走せてこよ (以上)

山の水熊の膽とも云ふ味を少し混へて悲しかりけ
れ

なだれすれ雪に當てたる日の鑿のこちよげにも
見ゆる晝かな

こちたかる丹塗の箱の後ろより蟻螂いでぬ役者の
やうに

天の川いつ見え初めんあきつなど飛びかふ空の青
き夕ぐれ

暑き日や煉瓦の塀の古りたるに忍草しのがしげれる庭の
北がは

七月の夜能の安宅みちのくへ判官おちて涼風ぞ吹く

吹くとなく紅き木の葉に従へる山風ありて霧の晴れ行く

勢につかで花咲く野の百合は野の百合君はわれに従へ

大學に行くなかれなど云ふ人をあらしめぬこそうらみなりけれ

大學は毒舌の罪きはまりて追はるるきはもめでたかりけれ

語らへばゆふべの空に月出でぬ骨牌の玉の横顔を
して

大
路
よ
り
杏
仁
水
の
夕
の
氣
な
が
れ
よ
り
く
る
わ
が
白
き
窓

人
と
居
て
い
つ
し
か
明
日
の
あ
る
こ
と
を
忘
る
ま
で
の
甘
き
夜
と
な
る

冬
の
日
の
倒
る
る
如
く
落
ち
行
け
ば
空
虚
に
残
る
裸
木
と
人

初
秋
や
月
光
莊
の
お
し
ろ
い
と
こ
ろ
の
通
ふ
夕
ぐ
れ
の
風

い
つ
ま
で
も
月
光
莊
の
お
し
ろ
い
の
香
に
夢
を
見
る
我
身
と
も
が
な

な
つ
か
し
き
秋
の
山
邊
の
し
ら
雲
を
お
し
ろ
い
執
り
て
思
ふ
人
か
な

われに似すこよなく思ひ上りたる水おしろいの香
ぞと覺ゆる

ひなげしを分けて出でこしめでたさも忘れ去るべ
き世のこちする

夏の花漫りに咲くとなげくなりいつより心變りは
てけん

散りし罌粟男に負けし形してなほ自らを捨てぬめ
でたさ

六月や長十郎と云ふ梨の並木に立ちて明きみちか
な

時は午路の上には日かげちり畑の土にはひなげし
のちる

温室に入ればメロンのかかりたり豊かなれども花
に勝らず

ありなしの煙の如くゆらめきてかかる葛くわをくぐる
温室

丹にの塔を五つの瓣が護りたるころも知らず南國
の蘭

たぐひなくな忘れ草の目の澄めり頼むところの深
きなるべし

少年の花菱草ひしごに蝶の寄り蜂のきたりてうづまきの
立つ

丘の上雲母きんぼの色の江戸川の見ゆるあたりの一むら
の罌粟

隙も無く圓くしげりてアカシヤの華やかに立つ丘
の路かな

をとどしの彌生の末のことを云ふ木草に逢ひてな
つかしきかな

白薔薇は眞紅の薔薇に氣上りしわれの涙に従ひて
おつ

知りがたきことを究めて薔薇の散り智慧に觸れざ
る雛罌粟も散る

天に去る薔薇のたましひ地の上に崩れて生くるひ
なげしの花

二三人紅き野薔薇の傘形のあづまやに入りよく笑
ふかな

ひなげしと遠く異なる身となりぬ松戸の丘に倚りて
思へば

くれなるの形の外の目に見えぬ愛欲の火の昇るひ
なげし

人の云ふいつはりにだに動きゆく心と見ゆるひな
げしの花

雛罌粟はたけなはに燃ゆあはれなり時もところも
人も忘れて

浅間の森の木暗しここはまた夏の花草火投げて遊
ぶ

眠れるや覺めて思ふやうまごやし安き心のわがう
まごやし

白まじり雲したたりし花と見え菖蒲咲くなり低き
畑に

紫のあやめがわれを描くなり若き友をばひなげし
の描く

菖蒲よりけしの畑に通ふみちほのかに濡れてなつ
かしきかな

花園は女の遊ぶところとてわれをまねばぬいづ草も
なし

ことやうに綺萱なびく信州のかの連山の雪をおも
へと

夏の日の未ひつの刻もすすしけれ繻子の芝くさ綺萱の
帯

むらがるる金鶏草に影と云ふくらきもの無し靡け
ど寄れど

黒めるは終りに近き罌粟なれど美しくしきこと初め
に倍す

昨日きのうのあたひを知らぬひなげしの盛りの花と思ひ
けるかな

ひなげしが飲みしめでたき薬をば人も服してその
毒に死ぬ

ひなげしは夢の中にて身を散らすわれは夢をば失
ひて散る

うすものの女の友を待ちえたる松戸の丘のひなげ
しの花

風立てば草の花皆馳するなりわが目の前の五千里
ばかり

こちたかる黒船に似る實を結び變りはてたる園の
えにしだ

醉態の朴の花こそめでたけれいやしき土の二ひろ
の上

花束を抱けばかよわきひなげしの脚こぼれいでわ
りなかりけれ

松戸なる人の贈りしひなげしを置けばいみじきう
すもの膝

死なんとも云はで別れし人故に思ひ上りもなくな
りにけり

(以下有島武郎氏を悲みて)

君亡くて悲しと云ふを少し越え苦しと云はば人怪
しまん

書かぬ文字言はぬ言葉も相知れどいかがすべきぞ
住む世隔る

しみじみとこの六月^{むつき}ほども言はでやがて死別^{しべつ}の
苦に逢へるかな

末つ方隔てを立てても云ひき男女^{おとこ 女}のはばかりに
由り

なつかしき書齋の戸口閉ざされし前にはかなき人
の身を泣く

難すれば泣きうべなひて思ふ時亡きまぼろしの笑
むこちする

信濃路の明星の湯に友待てば山風荒れて日の暮れ
し秋

山莊の終焉の室何故に一目見にけんそのむかしの
日

ゆくりなく君と下りし碓氷路をいつしか越えて歸
りこぬかな

客中の君が消息山陰さんいんの海にもまさりさびしと書け
る

赤倉に野尻の湖うみを見しほどのさかひにせめて君の
おはさば

わが泣けど君が幻うち笑めり他界の人の言ひがひ
もなく

とこしへの別れと知らず會場のロオランサンの繪
の方に來し

から松の山を這ひたる亡き人の煙の末のこちす
る雨

鈍色の空を眺めてある外のいみじきことを知らぬ
この頃(以上)

大地をば愛するものの悲しみを嘲める九月朔日の
天

休みなく地震して秋の月明にあはれ燃ゆるか東京
の街

光明を捨てし都がみづからを焼く焰上げあかくす
れども

わが立てる土堤の草原大海の波より急にうごくなりけり

おぼろげのものと不思議を思はざる心となりて悲しかりけれ

わが都火の海となり山の手に残るなかばは焼亡を待つ

凶器をもつてふことはさしおきて天に比するに足らぬ人間

身の生くる幸あるやあらざるやわが唯今の大事とはこれ

埤屋の夜の草枕をば吹くものは大地が洩らす絶望の息

一瞬にして都焼くもろしてふ心にだにもたとへが
たかり

大正の十二年秋帝王のみやことともにわれほろび
行く

天地崩ゆ生命を惜む心だに今しばしにて忘れはつ
べき

道行くは目ざすところのある如しうづくまる身の
あはれならまし

地震の夜半人に親しきこほろぎのよそげに鳴くも
寂しかりけれ

この夜半に生き残りたる數さぐる怪しき風の人間
を吹く

地ほろぶるこの期にいたり泣く涙いささか甘くお
もほゆるかな

月もまた危き中を逃れたる一人と見えぬ都焼くる

夜

みづからの亂れ心の相をして都の半燃え立ちにけ
り

誰見ても親はらからのこちすれ地震をさまりて
朝に到れば

地震の夜は茅草のごとくろ髪のとどに濡れて明
け行くもかな

天地の大動亂の一部をばなさんがために人やふた
めく

身ゆるがし地の苦惱する悲しさよともに死なんと
云はまほしけれ

ぬ 空にのみ規律残りて日の沈み廢墟の上に月上りき

天變がもたらすことの何なるを知らぬものなきけ
しきなるかな

傷負ひし人と柩が絶間なく前わたりする悪夢の二
日か

われの身に劫火の來り及ばぬを知りつる後かに心お
ちぬす

人あまた死ぬる日にして生きてるは死よりはかな
きここちこそすれ

なほも地震揺ればちまたを走る人生きとげぬなど
思へるも無し

露深き草の中にて弼たうぶ地震に死なざるいみじ
き我子

都焼く火事をふちどるけうとかるしるがね色の雲
におびゆる

死ぬるもの幾萬と聞くなげけるは數なきまでの數
にこそあらめ

愛憎の極度のものを運命がほしいままにも現せる
かな

こころをばいまだ知らねど妖雲のたつみの方に盛
り上りたる

魔の鳥が火の翅のべ羽ばたきす正目に人の見うべ
しやこれ

立つと見る家のただちに焼亡す火の泉より火のほ
とばしり

地震と火のややしづまりて雨降りぬあらぬ姿の都
の上に

たのみなく據りどころなく人の身をわが思ふこと
極りにけり

この都三日三夜燃えてただわれのわななく土を今
残すのみ

人の子を地より追はんとするものの力に抗すその
群この群

帝王の都の灰となりし
のち空行く雲もあはれなる
かな

ニコライの四壁の上の大空を雲ぞ流るる
覗きに寄れば

天變のいと大きなるものに逢ひ
さらに寂しき心となりぬ

禍ひを與へて心たのしまぬ空のけしきと
かつあはれなり

あな悲し逆まに地の回轉す
いかにかならんいかにしてまし

きはだちて眞白きことの哀れなり
わが學院の焼跡の灰

焼けはてし彼處此處にも立ちまさり心悲しき學院
の跡

十餘年わが書きためし草稿の跡あるべしや學院の
灰

わが心旅人よりも哀れなり焼けたるのちの駿河臺
行き

あぢきなきこの焼土に東京の芽のいでんとも思は
れぬかな

ニコライの塔のかけらにわれ倚りて見る東京の焦
土の色

もろもろのもの心よりかき消さる天變うごくこの
時に逢ひ

東京の銀座の跡のやけつちの横につらなる地平線
かな

かくてなほ無限の時をもつことに誇る自然のうと
ましきかな

焦土よりすでに都の興るとよわれの築くはそれに
似ぬかな

病より癒えつつ寂し大いなる水を渡りてこし身の
やうに

箱根路の大涌谷の劫風の身に沁む罪をただ一つ持
つ

夕ぐれは煙の質の薄^{すす}とてうしろの山に紛れけるか
な

鈴蟲がいつこほろぎに變りけん少しものなどわれ
思ひけん

高山の秋草の原ゆふやけが紅き縁とりなまめかし
けれ

はてもなき大地の月夜そことなく浮きただよへる
蟲の聲かな

しろがねにいまだ至らず初秋はつりがね草の色と
いはまし

こほろぎが清く寂しく鳴きいでぬ雲の中なる奥山
にして

あるが中に戀の涙のわれもかうわれの涙の野のわ
れもかう

松山に薦の臙脂えいじのひろごりて秋の朝のすずしかり
けれ

美しく我等の前に撒かれたりアポロの符しるしのひな
げしの花

昨日けふを司つかさどりたるものありきかく思ふのみ寂しけれ
ども

わが上の不思議を見よと思ふ日も愁ふる如く人の
云ふかな

手の上の砂に勝らずとく盡きし夏の初めの夕がた
の雨

昔より椗の梢に住みなれしさますまことは遠き灯
にして

雑草や柄のある星をもてあそぶをかしきものも混りたるかな

おりたちて水を灌げる少年のすでに膝まで及ぶ向日葵

秋草の山のぼる馬花を折りかかへて降る淺間の少女

人來り焼けし木立に吳竹を添へぬ生死の繪卷かこれは

夏の夜の紫玉の中に休らへり白鷺のごとうつくしき月

紅玉の重き脊をばうがちたり羽は得がたき宿命と知り

故ありて苦しき人と故ありて樂しき人となりにけるかな

人はいざわれは心の曲線のうつくしさをば悟るといはん

昨日けふの榮華の屑の身なりとも思ひなさまし寂しきに過ぐ

わが生くる乳の如くに思ひつる豆相の山の温泉も崩くづゆ

月射すや投げたる網のひろがれるはかなきさまのあはれ東京

初夏のいみじき風にとらへられしらじら散りぬ日の前の雨

故郷の北に向へる窓ありぬ友の祈禱の室むらのあはれ
なり

祈禱の室むら神は知らねどあはれなり友の涙の沁みぬ
と思へば

淋しけれイエスの弟子の片はしに備りてより愁へ
ぬ友も

むさし野の野方の村を踏むと云ふことにはまして
身に沁みし路

夏の霧地を這ひ歩き濡らしけん櫛の涙つたはりに
けん

雨降るや丘低くして滑らかに畑林などつらなる武
藏

信濃にて逢ひつる雨の匂ひして身の濡るこそ哀
れなりけれ

一ところ卯木うづきは刈らず縛めし野方の畑の麥の中み
ち

むさしのの野方の路に雨降りぬ六月いまだ涼しき
ゆふべ

美しくしき少女をたたふドンファンも光源氏も憎む
に足ると

黒髪は哀れなりけり何ごとか異なることに思ひ入り
たる

うすものはタンゴを踊る細腰こしこしに薔薇は眞白きたな
ぞこに見ん

夕立にてまりの花の濡るる見て湯浴ままほしくな
りにけるかな

あてやかに白き扇の羽ばたけるたそがれ時の内房
の縁

黒檀の卓水に似ぬ白鳥は棲まねど手など頼などう
つして

湯の街の暗き湯小屋に夕顔の湯浴みてあらばをか
しからまし

なほ覺めぬ夢見給ふと見ゆるなり藤むらさきのう
すものに由り

パラソルのめでたき下に居給はで人は車上に移り
けるかな

うすものや何處の王のかたはらへ行くや芝居の廊
のいく人

うす暗き病の洞に自らの身を投げ入れてこし方と
斷つ

悲しめば病を得ると云ふことに思ひいたらで人の
あれかし

病にもうつし心よ無くならで身の苦しやと歎かれ
ぞする

病して後の心の知りがたし思ひ入るなど云ふこと
も無き

氷をば枕に敷けど寒からず病むべかりけりもの思
ふ人

病みてより夜と晝との連続のわづらはしけれ常闇
となれ

いく人たにおのれ後れて歎くまに先立つ人となりぬ
べきかな

わが常の病室よりも晝明く夜の灯のくらし病院の
闇

思へらく山に飽きたる人ならん廢墟の土に隣りて
寝るは

燒跡の神田の町の病院のいと不思議なる朝ぼらけ
かな

われ病めば嗅げども觸るる匂なし秘密の花にあら
ぬ薔薇さへ

焼土をすこしならせる病室の前に歪める煉瓦の爐
かな

東京も上總もさびし稀にかくもらし給ひぬ鶴所先
生

石の床崩れし爐をばロオマかと興じがたしや先生
見れば

先生は痛き足のみ歎きます寂しきことはせんなし
として

目開けば先生ましぬこの庭に芍薬の芽をうつさん
がため

病する耳が聴くなる騒音とさま變りたるさびしき
ところ

まぼろしに廻廊建ての水莊の目にも見ゆるは何の
つづきぞ

筑紫より歸りし友を見ることも病めば悲しきこと
となりぬる

紫の揃ひの日傘もたらして友かへれども足立たぬ
かな

焼けし棕櫚黒髪のごと光りつつ筆の形に立ちて雨
降る

雨の夜に六番町の使きぬむかしの君がしたまひし
ごと

花あまた人贈りくる病室にとりたがへても寝るに
かあらん

ふらんすの煙草とるこの煙草など味ふごとし雨の
雜草

その際まの手術の室の光景を居合せし子のまた語り
出づ

そことなく病める湖畔はなまめかし名ある病は限
りあれども

ニロライも既に廢墟となりぬれば鐘おとづれず病
院町に

廊の灯の無果い花ちの木の乳のごと青く濁りて射せる
病室

末の子も病しつるが七日してわが枕邊にめでたく
も泣く

そのかみの廣間の高き礎とむかひて寝るがあぢき
なきかな

或家の塔ただ一つその外は形ともなきやけあとの
士

火事あとの前裁の石ラバに似ず白く悲しくまるが
れるかな

むらがりて路の生ひしも哀れなりありつる火事の
焼土なれば

涙盛る小さき器のありと聞く海の姿と思へるもの
を

今日癒えて病院を去る人見ではうごく心もはかな
かりけれ

病院の假屋の廊を朝踏むも憎き夢とは思はれぬか
な

森の木が皆火を噴けりしづかなるところを胸に描
けるなれど

階上や八人ヤチの中に相思樹の作者をさぐる春の夕か
ぜ

風吹けば見え隠れすれありしのち東京の灯も船の
灯のごと

あぢきなし夜に押されて地に近く點る灯がちとな
りし東京

かくもわれ低き机によりながら戀をしながら死に
てゆかまし

煙草よりうすものの如ひるがへる煙の立ちて愁は
しきかな

海のごと花を落せどなほ紅し太陽に似るめでたき
椿

鉢の花壺の花みな息づきぬ思ふことをば休めて見
れば

わが女王太子の宮に入りませるいみじかる夜の春
の雪かな

ある限り劣りて咲ける花も無しあさましきかな
園の薔薇

薔薇を嗅ぐ蘇りたるあかつきの大氣もこれに似ん
こちして

心にてほしいままなる戀するはなど罪あらん紅の
薔薇

紅薔薇は眞白き薔薇が大鳥の夢を見るところ人を思
へる

たくましき宵の明星いでてきぬ薔薇にくらべて品
劣れども

假にだに寂しきことの混らざる身と思ひなし薔薇
とある時

まぼろしの薔薇咲きめぐる日もありて衰へぬなど
思はれぬかな

莊園の薔薇を日ごとに送られてうらなつかしき冬
ごもりかな

薔薇の花今や終の近づきて限りも知らず甘き香を吐く

岡崎の蒼龍白虎めでたけれ夏の月夜のややふけしほど

玉よりも美しくしければ涙ぞと定めぬ夏の山の清水を

桂川水おもむろに動けども船はしたなく流れんとする
(以下上野原に遊びて)

空またく山に没してほのぐらき溪間の船の十人の客

桂川富士よりいでて濁流に終るとな見そ雨降るもの

山百合のあまたの蓄水晶のごとかがやける水上の
岩

雨の過ぎ斑に濡れし岩を見てさびしくなりぬ川の
逍遙

きりぎしの岩牛まで影のごと暗くも濡れて山の鳥
飛ぶ

山の雨降りとどまれと甲斐の岸相模の岸にうぐひ
すぞ啼く

峡谷に入りたる船を安からず下に思へばさむし山
かぜ

岩の根の涼しき紺に身を置ける山の鶺鴒山百合の
花

めでたくも隼のごと一瞬に龍門峽をいでしふねか
な

船すでに龍門峽をいでつれば廣き空より雨降りて
きぬ

いと廣くトロが通へる棧橋の這ひたる末も見がた
き河原

幾筋となく川分れあまりにも廣く寂しき甲斐の川
かな

月見草うす墨色の山を負ひあはれなれども族^{たぐひ}多く
居ぬ

船下り岩殿の山ちかづきぬ少し烈しきしぶきの中
に

御前山^{みまへやま}犬目^{いぬめ}の奥に遠山を見せんとしつつやみし雲
かな

船の先橋板にまで及ぶ日のかつらの川の高き水か
さ

雨降るや水と河原の入りまじりはてなく廣き山川
にして

雨降れば甲斐絹^{かひぬ}の機^{はた}の絹糸のうるめる白に似るか
つら川

灰色の川の續きにむら山の見え隠れして馬橋を行
く

きりぎしと言はんばかりに傾きて冷き川の板の假
橋

萩紅し二つの船のある水にいたる河原のとほき山
川

山川の眞白き波にまもられて船あてやかにとどま
れるかな

朧にも降りみふらずみすなる雨まして大河の上の
あやなさ

大河の水彼方をば青く行きささ濁りしてここに渦
まく

ひたひたと蛇籠に寄りて行く波のやや常ならで雨
船を打つ

針金に引かれて船の通ひたる渡しのあとのほそき
懸橋

月見草水の難にも逢ふ日かと満船の客あやぶめる
時

かつら川彼處に此處にうづまきす三時みときがほどに濁
流となり

日の三時雨に引かれて川波のわりなくまさり富士
おろし吹く

甲斐の雨眞白く打たで河原をばうす紫にほかす寂
しさ

水ぐるまいと華やかに夕立の中にめぐりてうぐひ
すの啼く

河原より華奢を極めて水車めぐると見たる細流こゆも
こゆ

十餘人つづきて山の路行けば夕立を撒く榛の枝か
な

千年の榎の枝に掛けられしやぐらめきたるわが宿
屋かな

蟬涼し忍草^{しのく}生ひたる板屋根を百尺低く見て立つ榎
の木

虹いでぬ榎の下に否あらずわが甲斐路より相模に
わたる

左なる榛の林に玉の輪をかくる虹かな高きに見れ
ば

ひぐらしと清水の音と甲斐の雨降りしく音に山暗
くなる

わが車月のひかりと横雨をこもごも浴びぬ山國を
行き(以上)

來し春に興る都と並べましわが樓臺は目に見えず
とも

そくばくの心萎へてある人に春の光よあまねくわ
たれ

な
家家が皆何事か思ひたるさま變りたる春も見るか

思へらく今年は去年に繋がれず飛躍の後に至りし
なれば

空晴れて春の初めとなりにけりかにかく去年を忘
れましわれ

忘れてはいかなる國の都ともわきまへがたし銀座
の春も

阿蘇山のやけ土原をあゆむよりさびし都の八百八
町

東京の廢墟を裾に引きたれば愁ひに氷る富士の山
かな

富士の山代代木が原の假小屋のつらなる上に愁ひ
つゝ立つ

曇るなり冬の心のなほ絡む正月の日と云はまほし
けれ

波のごと薄金の屋根うち並び昆布と見ゆる焼けた
る樹木

われ故に動く空とは思はねど春日曇りてあはれな
るかな

紫の女の襟の中にまでしみとほりくる廢墟のさむ
さ

その日より夢見ることとも忘れつれ春よおのれを新
しくせよ

黄昏れてうすく仄かに霧降れば旅の空めき悲し東
京

ありしのち家低くして海に似る都なれども春の日
を抱く

新しく春に逢ひたる花鳥の思ひを染めん百種のこ
ろも

今年より孔雀の鳥の緑をば人の少女も羽にすと聞
く

宵過ぎし雨をききつつ思ふなり奈落と云へるやは
らかき闇

降りつづく雨の世界に身を置くもふさはしきかな
惱ましくして

太空も曇り日がちとなりにけり苦しかりつる年の
くれ方

春と云ふ時を今より後にこんものとかけても思は
れぬかな

或時の戀しかりける燐寸の火の光に似たる冬の日
の薔薇

銀杏など少しこぼれてなつかしき薔薇の畑の霜じ
めりかな

ひなげしの花とある日に異らす冬籠りして思へる
ことも

思へらく岳陽樓のきさはしを登りし人も皆おのれ
のみ

雲上うんじやうのことと思はじ世の中のいみじきことの第一
とせん
(東宮の御慶びの日)

みくるまの衣きぬのいろめの物語人申すなり花のごと
しと

桐の實の黒むところと一筋の溝をはさめる大木おほきの
紅葉

美しくしきもみぢわが手に重りぬ誰より受くる祝福
ならん

東京の廢墟の上にわななきてちる極月のこの朝の
雪

天地のもの皆何を思ふらんまだ知らぬまで暗き極
月

六道の修羅のさまをばひと目見て筆つけ初めぬそ
のさかひにて

(横濱なる石引氏の震災記の端に)

恐らくはわが墓に来て泣きぬべきかの旅人の消息
の文

草も木もすべて怪しきかづらして狂へる日なり三
月にして

戀しけれかぶろの菊に似る薔薇の築地に咲きし鎌倉の家

連山の壁の一つに觸れも見で浅間の丘に寝るあぢきなさ
(以下信濃の旅にて)

浅間湯は筑摩の川の發すると云ふ山つづき松山に湧く

狂ほしく浅間の丘の斜面より吹き立つ風をいかがすべけん

客房の板戸の鳴るにおどろきてわれ温泉の霧に隠るる

山山の雪濃くうすしあまたたび見がたき晝の夢ならんこれ

一月の信濃の旅の明るけれ天がけるとも云はんばかりに

ぬ 山の日はずの川の流域の見えわたるまで全く昇り

ありと見えやがて跡なくなりぬなり梓の川は遠方にして

白 浅間橋女鳥羽河原の眞しるきは地の白山は天上の

こちす 山國の雲の美しくしもろもろの天女の相に馴るるこ

浴房へ池のこほりを見て通ふ丸木の廊の悲しかり
けれ

もの云はず泣きつつ夜半の雪降れる長き屋廊やぐらの右
左かな

雪國の温泉町のあけがたのうす墨色のなつかしき
かな

醫王山神宮寺にて打つ鐘もないがしろなる渦巻の
風

この國と飛彈のさかひに山ももへ重るものを日の
歩み入る

連山の穂高と聞けるあたりよりほのかにしらむ朝
ぼらけかな

連山のただ横さまに長きかな地上のちから限りあ
るため

なふれそと筑摩平のへだてたる山の心の知らまほ
しけれ

安曇野の梓の川のひかること青玉に過ぐ一月にし
て

冷たしと感ずる山も覚えぬもあらめと雪の山哀れ
なり

浴泉のものうくなりぬ仙女をば願ふ心もまた捨て
にけん

山の名をあまた知りたる宿主人現れつれば日も歩
み寄る

山の日はやどやの裏の菜園のえびいろを愛でよき
油塗る

蝶が嶽輕げに白し雪厚き穂高の峰のかたはらにし
て

山は山人は人ぞと山の云ひ人いひぬべきもの足ら
ぬ景

死ぬばかり信濃の國に愛着す雪かがやし山斯くも
云ふ

きらめくは雲が鎖したる山の顔見んと思へる明星
にして

信濃路をめぐれる山の半輪に雪かがやきて月に勝
れり

西北のつばくら嶽に極れる山にくらべてひろき空
かな

浴泉す雪の中より通ひくるいみじき息をもてはや
しつ

見るよりは山の白雪深からん人のさむさにそれも
變らじ

連山の雪にひかれてとどまればやがて淺間もうす
雪ぞ降る

安曇野を雪早足に過ぎつれば雪とも見えすほの赤
きかな

うす雪す上の淺間の湯のまちを横に抱ける赤松の
山

白雲の中にてすなる人間苦生きがひありてわれも
知るかな

山と水なまめかしかる一章とおのれの章の續かぬ
辛かさ

く 温泉が溝川となり柵のもとはしる音をば明方に聞

白雪と朝のうす黄の日のひかり籠れる裝の並ぶ山
かな

ぬ 朝あよりかくれてありし常念じやうねんの峰雲を出で友遠くき

飽くとなく浴泉の地を轉ずるもかねて思はぬ寂し
さにして

かな ひと列れいの蓼の穂のごと赤ばめる安壘あづみ平たいへいの日の出前

をやみなく散りかかれども肩濡れず寂しき雪の降
れる國かな

山風の急なるにしも追はれつつ筑摩を出でて伊那
の野に入る

潮尻の南はなべてなつかしき朽葉のいろの上伊那
郡

天龍の大河の芽をば見て過ぎぬ諏訪の岡谷の町の
はづれに

天龍は三尋みひろに足らぬ水なれど門川のごと芹の青ま
ず

こと成らぬみだれ心のおもむきに諏訪の湖氷せぬ
冬

惑へる灯三昧にある灯もありて水は山よりあはれ
なりけれ

渚には一つの船の裂かれたる半身に似る細き船浮
く

いさり男も戀に瘦せよとつくりけん諏訪の入江の
細長き船

人の云ふ非人の湯小屋傾きて川の芥にことならぬ
かな

温泉が間に人の身を置かず湧きて角間の川に流る
る

身はおきて手をひたすなり温泉に馴染みもつかぬ
旅心より

浅間より諏訪に來りて夕闇の湖畔を伊那の敏弱と
行く

湖をおほふばかりの灯かけあり山の人皆世を樂め
り

見るかぎり湖畔の山は美しくしき燈火の繩にいまし
められぬ

人早く來て住みつきし湖の四里の周圍の七ところ
の灯

末弱る蓼科おろし旅人は吹けどボブラの靡かざる
かな

温し夜の片はしの残りたる諏訪のやどやの浴房の
床

驛亭に小雪吹き込むやまかぜもありて我子の車を
送る

旅路より弟の手をとりていぬ丁まきろの年を越えし一の
子

子の車去りて七時ななとき経ちぬれば都に入りぬ描かくまば
るしも

別後にも母はゆたかに浴泉記かかんと思ふいまだ
驕れば

山やま岨さの棲形したるしら雪とともにうつくし宵の明
星

百合摘むと友のいひつる上諏訪の御堂の山に小雪
ちる朝

諏訪山に板石を切る男より勝るとするはただ若さ
のみ

湖へ茅野と有賀を併せたる幅ある雲の下りてこし
かな

わが燃ゆるところと觸れぬ千年をまちて氷の湖を
見よ

水城なるかしらの石に旅人の現れぬなど雲のおも
ふ日

駒が嶽乗鞍が嶽その中の遙かなるにもわれ寂しけ
れ

みづうみの聲ききつけし夕闇の諏訪の湖畔の桑畑
のみち

かたはらに温泉流るる雪の洞作りて夢を見に通は
まし

守屋嶽龜甲形にうす雪を置きたる華奢もなつかし
きかな

透し見よ守屋の嶽の薄雪はたそがれ前のひと時に
のみ

見る限り力張りたる山なれど湖水なれども明日い
かならん

熱高き諏訪の温泉のみなもとを戀といはしめ今ひ
と度は

湖は心安げに生れいではた消えて行く灯をあまた
もつ

御手洗の垂氷なれども白玉の燈籠に似てなまめか
しけれ

窓 蓼科のいみじき雪をのぞくなり諏訪明神の廻廊の

な 若くして驕る心に見んとせし水晶の瀧かかる山か

す むつかしく物を思へど温泉の口傾かず止まらず走ら
ず (以上)

大正十二年七月より十三年七月に至る一年間の自作からこの
 一巻を撰びました。此間に富士山麓の湖水に遊び、また南信
 濃の旅をもし、稀有な大地震にも遇ひました。序に代へて巻
 頭に載せた詩も此間に作つたものの一部です。舊い親友であ
 る山本鼎さんが、また此集にも装幀の圖案をして下さつたこ
 とを嬉しく思ひます。(著者)

瑠璃光 畢

瑠璃光

定價 壹圓八拾錢



大正十四年一月五日印刷
 大正十四年一月十日發行

著者 與謝野晶子

發行所 北原鐵雄
東京市小石川區藤原九番地

印刷所 山本源太郎
東京市東區新町四番地

發行所 東京小石川一〇九番地
 會社 振替東京二四八八八番
アルス

北原白秋氏著書

白秋詩集

全二卷

詩壇の巨匠白秋氏の全集成る。收むる處純情
涙を流すべき小唄あり、輕快歌ふべき俗謡あ
り天真自ら成せる童謡あり、法悦光明の歡樂
境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象
徴詩あり、印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、
自由奔放なる散文詩あり、雄渾壯大絢爛を極
むる長篇詩あり、各種の詩風交錯して渾然微
妙の一大交響樂を形成し詩壇嘗つて見ざる壯
觀を呈す。本集全二卷通卷一千三百餘頁詩數
六百餘篇氏の最近に至る全詩を網羅する空前
の大詩集茲に完成す。恩地氏の装幀及扉畫亦
清麗無比藝術の士の愛誦し後世に傳ふべき物
本集を措いて何を他に求めんや。

青	赤	大	畑	雪	邪	思	朱
燈集	鳥小鳥集	悲集	眞珠抄白金の獨樂	三崎詩集	宗門	ひ	泥
(新作小唄俗謡等)	(童謡集)		(景物詩)	(景物詩)	(象徴詩集)	(抒情小曲集)	(長篇詩集)

● 銀七拾册各料送 ● 銀拾八圓貳册各價定

北原白秋氏著書

小唄と民謡 あじの葉

詩壇の王者白秋氏の唄と民謡は實に天下一品で、何人の追躰をもゆるさない。本書は氏が最近三年間の收穫を集めたもので純情涙すべき小唄、醇撲愛すべき民謡、眞に幽趣微韻を極むる珠玉の名作百八十餘篇が收められた。装幀は森田恒友氏の筆になり清酒酌新、近來稀に見るの美本なり

竹林幽居

ひとりかくれた筈に、
若荷もしるく香にほふ。
醉ふてほろりとする日でも、
わしやさびしいぞ宵雀。
朝顔
今朝はとなりの戯に咲く、
花朝顔の小ささよ。
貧しい處の花なれば
となりへ往ても小ささよ。

定價壹圓八拾錢・送料拾參錢

北原白秋氏著書

小唄集 白秋小唄集

歌ひ易く解し易く愛誦措く能はざる小唄二百餘篇を收む。附録「さすらいの唄」「酒場の唄」「こんど生れたら」「カルメンの唄」「山の唄」「別れの唄」本文二度刷、表紙サラセン模様、絹繻子表紙袖珍判箱入極美本

抒情小詩 わすれなぐさ

本書はその美しさ、懐しさ讀めば涙も溢れ出づべき白秋氏の抒情小曲を收めたものである。装幀は山本鼎氏白金の光澤美しき絹繻子にクロバールと螢の模様をあらはした瀟洒清新の趣は見るからに心躍る。

城ヶ島の雨

雨はふる、ふる、城ヶ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。

なわすれぐさ

面帕のうしろに見へて、
その眸にはふごとくも
空いろに透きて、葉がげに
今日も咲くなわすれの花

定價各冊八拾錢・送料各冊拾參錢

北原白秋氏著書

詩歌の
洗心雜話

詩や歌はどうして作るか、これは詩歌に志す人々の第一に知らんとする處であるが、幽趣微韻を極むる微妙な詩歌の機微を説きあかすといふことは、實に六つかしい事である。本書は詩歌壇の巨匠白秋氏が長い間の苦い経験から體得された心境を、誰にも分るやさしい言葉で、詩歌を作るに何よりも大切な心の据ゑ方、感じ方、物の見方等を澤山の面白い例話をあげて説かれたもので、詩歌の根本藝術の極致がこの一卷に收められてゐる。詩歌の作り方を知らんとする人、眞に詩歌を味はんとする人々の一讀を薦む。

裝幀 恩地孝四郎氏

定價 圓壹拾錢・送料 拾貳錢

感想集

飯倉だより

島崎藤村著

金のやうな静けさと光とを持つた藤村氏の感想集である。むつゝりむつゝりと、然し誠實さのこもつた口調で、其書齋に於ける東西古今の文藝批評を聞く思ひがする。この一書を通讀すると、氏の性格、氏の人生觀といふやうなものが、字句の間に一々脈絡を保つて生々として來るのを感じる。
「朝を思ひ、又夕を思ふべし」と云つた芭蕉の言葉に思ひ入つた著者が、「初恋を思ふべし」と度ましく言ひ放てるのも、彼の「新生」を書いた著者が、バスカルの、「心胸には道理に知られない道理がある。」といふやうな言葉を抄録してゐるのも意味深いことだ。どの頁を開いて見ても、人間苦に徹した人でなければ現はし得ない言葉：：全人格：：が嚴肅に迫つて來る。そしてその明澄な文章は、靜かな、ものの深さ、短かきものの鋭さと云ふやうな事が泌々と味ははれる。その數行の短い文章にも生命の輝きがある。讀むよりも味はふべき心の糧として江湖に推奨する。
——山本鼎氏裝幀・四六大判特製美本——

定價 圓壹拾錢・送料 拾七錢

弘田龍太郎氏作曲集

童謡
樂譜

ほうほう螢

北原白秋氏詩
石井鶴三氏書

内容

ほうほう螢
雀のお宿
ほつほのお家
蝸牛角ふれ
白い白のお月さま
雨
鳩の浮巢
離れ小島の
とほせんぼ
蝶々と仔牛

やさしく、歌ひ易く、然して趣味深い童謡樂譜書は本書です。家庭に學校に然して音楽好愛者の必ず備ふべき名著です。本文二度刷、善美を極む。

童謡
樂譜

夕焼とんぼ

北原白秋氏詩
矢部季氏書

内容

夕焼とんぼ
物臭太郎
かぜひき雀
迎へ火
ちんころ兵隊
山のあなたを
蝶々の子供
仔馬の道ぐさ
お祭

本書はほう／＼、螢の姉妹篇にして著者の近作中の最も傑出したる八篇を收められしものです。前者を備へし人は云はすもがな、音楽を好愛する人々の必備の名著です。本文二度刷善美を極む。

定價各冊壹圓貳拾錢・送料各冊拾錢

一九二五、四、五

E. O. 掃
く
戴
と